

## バレーボールのジュニア年代におけるコーチに関する研究 I

—千葉県におけるジュニアコーチのプロフィールに関する実態調査—

松井 泰二\*, 都澤 凡夫\*\*, 中西 康己\*\*, 松田 裕雄\*\*

A study of the coaches of junior high school students of volleyball I

—Investigation into the actual conditions about the coaches' profile in Chiba.—

Taiji MATSUI\*, Tadao MIYAKOZAWA\*, Yasumi NAKANISHI\*, Yasuo MATSUDA\*

The researcher investigated the profile of volleyball coaches of junior high school. The research aims to clarify the actual condition about the coaches' profile. The questionnaire was distributed to the coaches of junior high school teams who are registered with the Chiba Volleyball Association in 2003.

The responses are summarized as follows:

- (1) 76% of the sample comprises males. 22% of the sample comprises females. 2% did not identify their sex.
- (2) 48% of the coaches are 40 to 49 years old. While 13% are 20 to 29 years old.
- (3) 99% of the respondents are teachers. Out of the 92% are teachers. And 55% are home-room teachers.
- (4) 23% said that they had less than five years of volleyball coaching career.
- (5) The coaches who have had experienced playing volleyball amounts to 50%. While those who did not have experience totals 46%. No answer was 4%.
- (6) Those who played volleyball at university is approximately 12%.
- (7) Those who teach volleyball but are reluctant to do so comprise 41%.
- (8) 48% say that they do not have enough capability to coach volleyball. While 52% are confident about their ability.
- (9) Those who acquired a coach license only amounts to 1%.

**Key words** : volleyball, junior high school students, coaches, profile, the actual conditions

本研究は、ジュニア年代（中学生）のコーチのプロフィールを調査し、実態を明らかにすることを目的にした。平成15年度千葉県バレーボール協会に登録した中学校チームのコーチを対象に調査票を用い郵送調査法にて行った。結果は以下の通りである。

- (1) 性別については、「男性」が76%、「女性」が22%であった。無回答は2%であった。
- (2) 年齢層については、「40才代」が最も多く全体の48%に及んだ。また、「20才代」は僅か13%であった。
- (3) 「教員」が99%を占めていた。そのうち、92%が「教諭」であり、また、「担任」が55%であった。
- (4) バレーボール指導歴は「5年未満」が最も多く、23%であった。
- (5) 「バレーボール競技経験者」が50%、「未経験者」が46%であった。
- (6) 「大学体育会まで専門的に競技したコーチ」は僅かに12%であった。
- (7) バレーボール部を仕方なく引き受けたコーチが41%いた。
- (8) コーチの48%が自身の指導力は、「多少の指導力はあるがまだ不足している」と感じている。
- (9) コーチライセンスを所持しているコーチは僅か1%であった。

以上の結果から、コーチの高齢化、専門コーチ不足の実態が明らかになった。若手コーチの確保と育成の必要性、さらには、専門外コーチが46%存在すること、バレーボール指導歴が5年未満のコーチが23%存在することから、専門外・指導経験の浅いコーチへのコーチングカリキュラムの作成と提示が急務であることが分った。

**Key words** : バレーボール, ジュニア年代, コーチ, プロフィール, 実態調査

## I. 緒 言

我が国におけるスポーツ実践環境は欧米に比べ極めて悪く、特に将来を担うジュニア年代（中学生期）においては

まだまだ学校における部活動に依存しているのが現状である。筆者自身千葉県公立中学校で保健体育科教諭として、またバレーボール部顧問として12年間現場で教育に携わってきた。その経験的側面から部活動を捉えると、「教師」という立場で「生徒（選手）」と接するため、必ず生活指導や管理という問題が絡み、教育的視点から指導しなければならない。よって、技術指導のみならず生活指導や精神

\*筑波大学 体育研究科 \*\*筑波大学 体育科学系

的指導にも傾注し、コーチでありながらも教師として指導している面が多い現実がある。また、部活動指導者として部活動を運営するにあたっては、コーチライセンスを必要としない。それ故、多くの指導者は理論に基づいた指導をしているが、自分の経験のみに基づいた恣意的な指導をしている指導者が存在することも現実である。このことに示されるような現場で起きているさまざまな問題を1つ1つ解消し、よりよいスポーツ環境でジュニア年代を育成することが、現在の日本のスポーツにおける競技力の向上とスポーツ人口の増加につながると考えられる。近年日本スポーツ界で飛躍的な競技力向上が図られているサッカー界では、「強化指針」を打ち出し、一貫して選手を育てることを示している<sup>14)</sup>。このことは1998年のワールドカップ初出場、2002年ワールドカップ初勝利の大きな原動力となった。つまり、正しい情報をコーチ・選手に与えるためのシステムを構築し、浸透していると考えられる。

バレーボール競技においても例外ではなく、競技力向上のためにはまずコーチに正しい知識を与えることが必要である。そして、その正しい知識とは提供者サイドの一般入門書的な視点からの知識ではなく、コーチの実態を把握した上で知識を提供することである。換言すれば、コーチの実態に応じた正しい知識の提供をしなければならない。実態を調査せずに知識を与えることは、受容者が求めている知識を提供しているとは言いがたい。この双方のコミュニケーションを密にするには、コーチの実態を明らかにすることではないかと考える。

バレーボールに関する研究論文は数多く存在するものの、ジュニア年代コーチに関する先行研究は見当たらない。

そこで、ジュニア年代コーチを対象にした実態調査を行うことにより、部活動指導・スポーツ指導に携わるコーチの現状を明らかにし、問題の抽出をすることこそ、「長期的視野に立った選手の育成」の重要な手がかりとなると考えられる。

コーチは、各選手的能力・資質に代表されるような個々の特徴を的確に捉え、各選手に応じた指導メニューを組み立てなければならない。このことはコーチを指導する際にも例外ではなく、コーチの実態に応じたコーチングカリキュラムが作成されるべきである。

以上のことから、本研究は、実際にジュニアコーチがどのような経歴や意識を持っているかという実態を明らかにすること、また問題抽出のための実態調査と位置づけた。

## II. 対象と方法

平成15年度千葉県バレーボール協会小中体連バレーボール専門部に登録した中学校チーム（男子150校・女子364校・合計514校）のコーチ514名を対象に調査票を用い郵送調査法にて行った。回答数は330校（名）であり、回答率は64.2%であった。

## III. 結果と考察

### 1. 職業・職種・学校内職種

ジュニアコーチの「職業」については「教員」が96%であり、「教員以外（事務員など）」が2%、残りの2%が「無回答」であった（図1）。

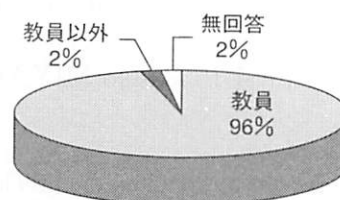


図1 コーチの職業

「コーチの職種」について尋ねたところ、「教諭」が92%、「教頭」2%、「常勤講師」「非常勤講師」がそれぞれ1%、「校長」は0%、「その他」は2%（事務員など）であった（「無回答」2%）（図2）。また、教員に関して「学校内における自身の任務・役職について」尋ねたところ、「担任」が最も多く55%と半数以上を占め、次いで「学年主任」17%、「副担任」13%、「生徒指導主任」7%、「教務主任」6%、「教頭」2%、「校長」は0%であった（図3）。

教員としての視点で捉えてみると、今津は<sup>1)</sup>、「校長・教頭・教員のストレス調査（要約）」の中で、「毎日ひじょうに忙しい」と感じている「校長」は65%、「教頭」は83%、「教員」は94%という結果を示している。教員は本

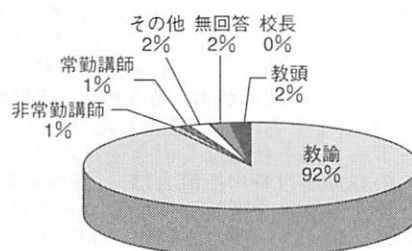


図2 コーチの職種

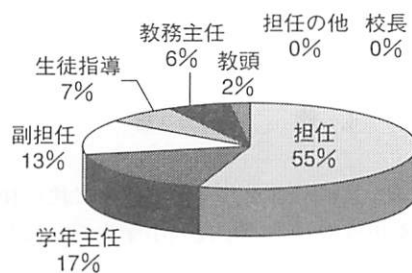


図3 学校内職種

務だけでもストレスが大きい、さらに部活動を担当することとなると、さらに増大すると考えてよいであろう。

大庭ら<sup>7)</sup>は、「中学校教員としての役割は、年々多忙を極めており、生徒側の『ゆとり教育』とは対照的に『ゆとり教育』を生み出すための教員のゆとりがますます少なくなっている」と言っている。

中学生は思春期の多感な時期にあたり、反抗期にさしかかる子どもは大人に対する価値観の変化に伴い、人間関係の在り方も自ずと変わってくる。したがって、各教室約40人の個性豊かな子どもに対し、ものの考え方やとらえ方をしっかりと伝えることは非常に根気と熱意のいるものである。

では、平成13年度に筆者が勤務していた千葉県A市における中学校教員の1日の校務について触れてみることにする(表1)。

A市における公立中学校の勤務時間は8時15分から17時である。しかし、この勤務時間内では納まらない仕事内容となっている。教師の持ち授業時数は担任が週20時間、副担任22時間、生徒指導主任12時間、教務主任10時間、教頭6時間(学校によって異なる)となっている。平成

13年度において、一週間の日課表上の総授業コマ数は、30時間(土曜授業あり)と27時間(第2・4週土曜日休業日)である。筆者は3学年担任・保健体育科・生活指導担当であったので、授業のコマ数は保健体育18時間、道徳1時間、学級活動1時間の合計20時間であった。授業とは別に生活指導部会1時間、体育科部会1時間があり、実質22時間である。したがって、授業のない「空き時間」は週あたり8時間(土曜授業あり)と5時間(第2・4週土曜日)である。この空き時間に朝自習や個人ノート点検、教材研究、学級・学年・部活動雑務、生徒指導校内巡回等を行う。学級における指導「帰りの会(ホームルーム)」が終了するのが16時00分である。その後に諸会議や委員会活動、家庭訪問などが勤務時間外にも行われているのが現状である。そして、その後に部活動指導をするわけである。

また、学校行事・研究授業準備・生徒指導上の対応が深夜に及ぶことも少なくない。また、「総合的学習の時間」の新しい教育内容の導入は、試行錯誤の連続であり多忙感に拍車をかけている<sup>7)</sup>。

表1 中学校教員(筆者自身)の1日の動き

時刻	日課	教員の動き
6:45	体育館開錠	体育館の開錠
7:00	部活動開始	体育館で指導
7:55	部活動終了	
8:00	あいさつ運動	校門で生徒にあいさつする
8:15	教室で出欠確認	出欠を確認
8:20	職員打合わせ	教員間での連絡・確認
8:30	朝の会	生徒へ連絡事項
8:45	1時間目開始	授業時間前に活動場所へ移動
12:35	4時間目終了	
12:40	給食指導	生徒と共に食事・交流
13:00	昼休み	
13:35	5時間目開始	授業前に活動場所へ移動
15:25	6時間目終了	
15:30	清掃指導	教室を中心に担当指導の清掃
15:45	清掃終了	
15:50	帰りの会	1日の反省・翌日の連絡
16:00	下校指導 諸会議・生徒活動	学級で班会議を行う
18:00	部活動指導 部活動終了	戸締まり・消灯を行う

## 2. 性別・年齢・結婚の有無

ジュニアコーチの性別の割合を見てみると「男性」が76%、「女性」22%、「無回答」2%であった(図4)。山口<sup>12)</sup>の調査によると、部活動コーチの性別割合は、「男性」64.9%、「女性」35.1%であり、いずれの調査でも男性が60%を越えている。また、学校基本調査(平成15年度文部科学省)を用いて指導者と教員の構成を照合すると、教員(本務者)の割合は、男性が59.1%、女性が40.9%で

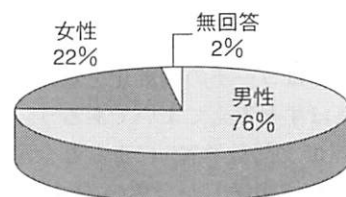


図4 コーチの性別

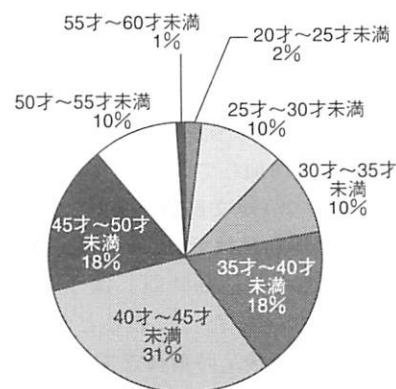


図5 コーチの年齢構成

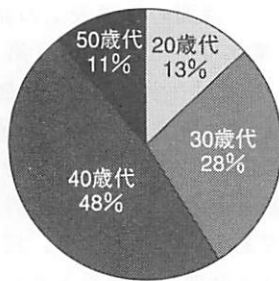


図6 コーチの年代別割合

ある。教員全体の男女比は全国と千葉に大きな差はなかったが、部活動コーチの男女比は千葉県では約8:2であり、全国では6:4であった。以上のように、部活動コーチ・教員いずれも男性が全体の60%以上を占めている結果となった。

年齢に関しては、「20才～25才未満」、「25才～30才未満」、「30才～35才未満」、「35才～40才未満」、「40才～45才未満」、「45才～50才未満」、「50才～55才未満」、「55才～60才未満」、「60才以上」のように9区分した。

最も多かったのは「40才～45才未満」の31%、次いで「35才～40才未満」・「45～50才未満」の18%であった(図5)。年代別に分けると「40才代」が48%を占め、次いで「30才代」の28%、「20才代」の13%、「50才代」の11%となっている(図6)。

このことは昨今言われている教員の高齢化を反映している結果と言えるであろう。特に20才代のコーチがわずか13%しかない現実を真摯に受け止め、若手コーチの確保・育成に力を注がなければならない。このように教員の高齢化が加速的に進んでいる現状から考えて、このままこの問題を手放しにしていれば今後さらに肥大化、深刻化することは明らかである。このことは、教員の年齢構成上の問題が厳しいことはコーチの高齢化を意味し、選手自身に多様な影響を及ぼすと考えてよいであろう。教員の高齢化現象は、平成13年度文部科学省<sup>6)</sup>によると全国の中学校においては「40才～45才未満」が全体の21.8%であり、「25歳未満」は僅か1.3%であった。千葉県においては「40才～45才未満」が全体の26%であり最も高く、「25歳未満」は0.8%と最も低かった<sup>2)</sup>。千葉県の調査結果は全国と比較し同じ傾向であると言える。また、全国においてこの調査の推移を平成7年度・平成10年度と比較してみると、「25歳未満」は3.2%から2.5%へ減少し、「40才～45才未満」は15.2%から18.3%へ増加している<sup>6)</sup>。

平成9年度文部省(現文部科学省)<sup>5)</sup>によると、運動部活動の週あたりの活動日数では、「6日」が46.3%と最も多く、「平日1日あたり活動時間」は「2～3時間未満」が最も多く54.8%であった。このことから考えても、教員は拘束時間として午後7時前後まで部活動に従事しており、その後に、本務である学級担任・教科担任・学年分掌・校務分掌などの事務的な処理に追われ、帰宅時間が家

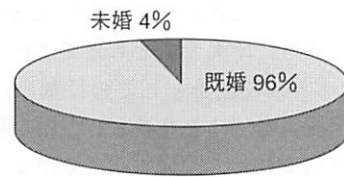


図7 コーチの既婚割合

庭の夕食後になることもめずらしくないことである。また、家庭において育児中の教員であれば、学校で仕事ができる時間も限られているので、家庭に仕事を持ち込まなければならない。育児中の教師が部活動指導をする環境はひじょうに厳しいと言える。そのうえ平日においては、部活動指導に対する手当は支払われない。図7のように「既婚者」が96%であることから、特に既婚女性は、家事などの諸事情により帰宅しなければならないこともあり、部活動において十分な活動をしづらい環境であることが分る。

以上のことから、ジュニアコーチは、学校教員・学校部活動だけに依存するのは限界である。東京都スポーツ振興審議会<sup>10)</sup>は、「従来から運動部活動は教員がその指導を担ってきており、これまで、指導する教員に運動やスポーツの指導に関する専門性を有しているものが少ないという課題を抱えてきた。また、最近では、教員数の減少から、指導者不足という課題にも直面している。この課題を解消するには、『外部指導員』制度の積極的な導入とその推進と充実が必要である。」とある。

行政の早急な対策が必要であると同時に学校側も門戸開放の時代が到来していることを認識し、外部コーチ等の導入を積極的に行わなければならない。

### 3. 教職員歴・バレーボール部指導歴・競技歴・指導実績

教職員歴を分析するにあたり、以下のような10区分にした。

「0年(1年未満)」、「1年～5年未満」、「5年～10年未満」、「10年～15年未満」、「15年～20年未満」、「20年～25年未満」、「25年～30年未満」、「30年～35年未満」、「35年～40年未満」、「40年以上」とした。最も高い値を示し

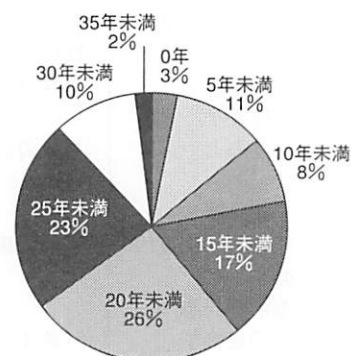


図8 教職員歴

たのが「15年～20年未満」の26%、次いで「20年～25年未満」の23%、「10年～15年未満」の17%であった(図8)。

バレーボール部指導歴に関しては、前出の選択肢に準じて10区分した。最も高い値を示したのは「1～5年未満」の23%であった。次いで、「10年～15年未満」・「15年～20年未満」の20%となっており、「0年(1年未満)」は

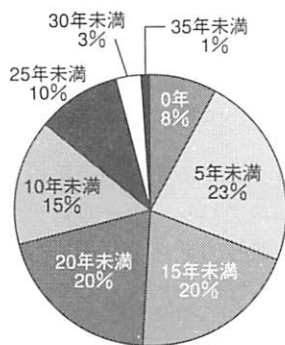


図9 バレーボール部指導歴

8%であった(図9)。

この結果は、自分の希望する部活動を長年指導できるわけではなく、学校の事情に応じて配属されるということであり、自分の専門種目部活動、あるいは希望部活動を担当できる保障がないことを意味している。

バレーボール部指導歴「1～5年未満」と「0年(1年未満)」を合わせると31%であることから、バレーボール部指導歴が浅いコーチに対する指導カリキュラムの提供が必要と考えられる。

次に、バレーボールコーチがプレーヤーとして競技経験があるかどうか尋ねてみた。「競技経験がある」との回答が50%であり、「競技経験がない」は46%であった(図10)。実際に半数近くのコーチがバレーボールの競技経験がないという実態が明らかになった。

東京都スポーツ振興審議会<sup>9)</sup>によると、「運動部活動の指導者は、生徒を育て愛情と個性・能力を最大限に伸ばすトレーニング理論や指導技術などの高い専門性が求められる。しかし、中学校運動部活動の指導体制の現状を見て

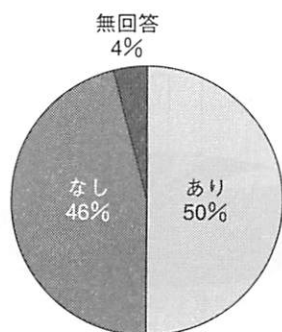


図10 バレーボール競技経験の有無

みると、指導者として必要な高い専門性を有する教員は少なく、必ずしも十分な指導力を有した教員が指導に当たっているとは言えない状況にある。」とまとめている。このような状況下では、生徒1人1人の持つ個性や能力の伸長を期待することはできないであろう。ジュニア年代コーチの重要な任務として、小野<sup>10)</sup>は「最も吸収しやすい時期にその課題を与えていくこと」そして「後の発達の妨げになる要因を取り除いてあげること」が大切であると述べている。したがって、当然のことながらコーチは、指導する上での知識をしっかりと身につけなければならない。また、技術指導に関して言えば、バレーボール競技未経験コーチでもすぐに理論に基づいたバレーボール指導ができるようなカリキュラム作りが急務であり、1人でも多くのジュニア選手の個性や能力の伸長を可能にするような環境を創るのは、コーチの大きな責務である。

次に、ジュニアコーチがプレーヤーとしての経験がどれくらいあるのかを検討してみたい。そこで、競技歴区分を「小学校期」「中学校期」「高等学校期」「大学体育会所属」「大学同好会所属」「実業団」「クラブチーム(家庭婦人チームを含む)」の7区分にした。最も多かったのは「中学校期」・「高等学校期」の33%であり、次いで「大学体育会」の13%、最も少なかったのは「実業団」の1%であった(図11)。また「小学校期」の経験が2%と少ない要因として、千葉県は小学校登録チーム数が全国で47都道府県中43番目(52チーム、平成14年度登録)と極めて少ないことが考えられる<sup>15)</sup>。

大学体育会は、専門競技を追求し活動している。体育会出身者はその専門技術や知識を活かし、若年層の指導や専門競技外のコーチへの伝達、そしてバレーボール競技の普及活動の中心的存在にならなければならない。

コーチの大会実績(指導実績)について考察してみる。この項目に関しては、「全国大会2回以上出場」「全国大会1回出場」「関東大会2回出場」「関東大会1回出場」「県大会3位入賞」「県大会出場」「支部大会3位入賞」「支部大会出場」に区分した。最も該当者が多いのは「県大会出場」が全体の42%おり、次いで「支部大会出場」の13%、「支部大会3位入賞」の10%となっている(図12)。

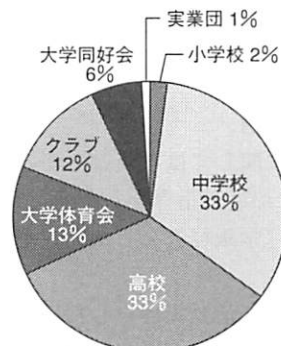


図11 バレーボール競技歴区分

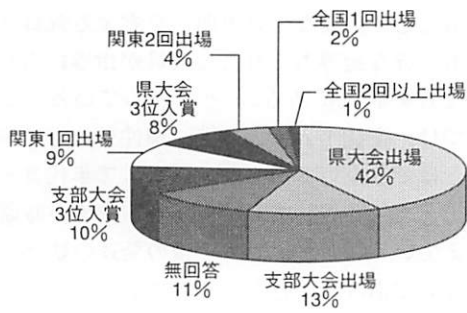


図12 コーチの大会実績

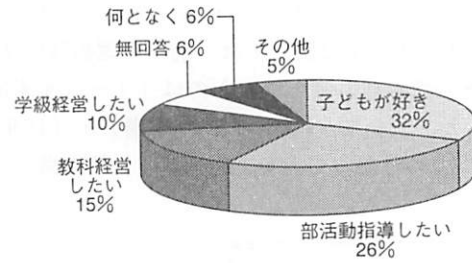


図13 教員の志望理由

このことから、42%のコーチは自チームを率いて各支部（市町村大会）を勝ち抜き、代表として県大会に出場させている。千葉県における中学校の県大会は11月の新人大会、6月の選手権大会、7月の総合体育大会（この大会のみ関東全国大会に続いている）と3回あり、このうち11月・6月の県大会には支部で平均2~3チーム（支部の登録チーム数による）出場することができるが、7月の県大会は1チームしか出場することはできない（但し、前年度優勝、支部の登録数などにより出場枠が変動する）。多くのチームは支部大会を勝ち抜き、千葉県大会への出場を近目標として日々練習に取り組んでいる。

最近、ジュニアチームは、小学校時に優秀な選手を集めてチーム力を向上させるといった方法が横行している。実際千葉県においても、男子においては越境入学、女子においては私立中学校が、優秀な生徒を勧誘し県大会の上位に名前を重ねるようになってきた。以前よりこのような傾向は見うけられていたが、近年さらに拍車がかかっている。この傾向は全国に広がっており、関東地区においては、特に東京都は男子・女子共に越境入学や私立中学校のように優秀な選手の勧誘をしなければ、東京都大会上位に進出することは非常に厳しい状況である。公立中学校で通学学区の範囲でバレーボール競技に携わっている選手やコーチにとっての近目標は、近くて遠い目標となってしまった。総じて、ジュニアコーチは、チーム力重視指導から「個を育てる指導」に転換しなければならない。優秀な選手を勧誘したチームのコーチは、チーム力重視指導ではなく「個の育成」に徹底すべきである。日本のバレーボール競技力の低迷は、この選手育成方法にも大きな要因があると思われる。

#### 4. 教員への志望理由

教員の志望理由に関しては「子どもが好き」が32%と最も多く、次いで、「部活動指導をしたい」26%、「教科経営をしたい」が15%、「学級経営をしたい」が10%となっている（図13）。

コーチの26%が「部活動指導をしたい」という志望理由であることは、部活動指導が勤務時間外でボランティア的な性質にもかかわらず、自分の経験や特技を活かしたり、

生徒との時間を作ろうとする積極的姿勢の表れと理解してよいであろう。ジュニアバレーボールコーチの意識は、日本バレーボール界の競技力低迷を打開すべく、将来の日本を背負う選手の育成に繋がると考えてよいであろう。

#### 5. バレーボール部顧問になった理由

バレーボール部顧問になった理由について尋ねたところ、「バレーボールが好き」が25%、次いで「担当顧問不在等により、仕方なく」が22%、「バレーボールを教えたい」が20%、「割り振られたので仕方なく」が13%となっている。積極的に顧問になっている指導者が多い反面、「仕方なく」「希望する部がなかった」等の消極的な理由での受諾が41%に及んでいることが分った。また、「バレーボールが好き」、「バレーボールを教えたい」などのバレーボールに興味を持って受諾したコーチは45%であった（図14）。

教員の配置に関しては部活動指導については考慮しないため、勤務校には前任者がすでに存在したり、顧問の転出により急遽、顧問不在運動部を指導しなければならない状況が頻繁に起こっている。よって顧問は、新しい担当種目の研究をせざるを得ず、さらに負担が増すといった具合である。年度初めの学校現場では、職員会議等で運動部活動顧問がなかなか見つからず、多くの時間を費やしている。顧問不在の場合には休部・廃部・本年度募集なし等の処置がなされる。できる限り学校側も地域・保護者・生徒の意向を汲むために高齢の教員に依頼したり、経験のない専門外部活動の顧問を受諾せざるを得なくなったりと、できるだけ生徒の活動を保障する方向で動く。しかしながら、や

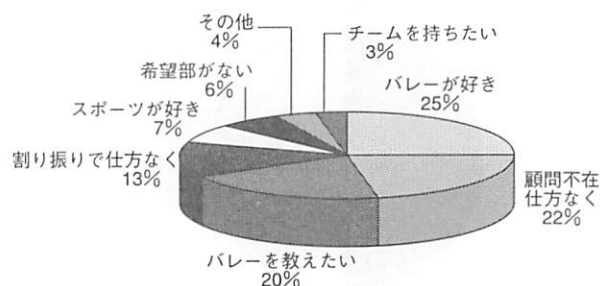


図14 バレーボール部顧問になった理由

むを得ず顧問になっている教員の心労は計り知れないだろう。

教育学者 Bollnow, F. は著書『教育的雰囲気』(1965)の中で、「教育者の感情的態度は被教育者の感情的態度に呼応するものであると…。」「子どもはまず母親や他の信頼される人によって、かれに寄せられる絶対的信頼に満ちた雰囲気の中で育てられなければならない。そのような雰囲気の中でみる子どもは正しく発達することができるし、未来の世界の入り口も信頼された人間とのかかわりの中で開かれる。」と説いている。したがって、仕方なく引き受けたにしろ、自分の職務に全うし子どもたちに精一杯の愛を与え続けなければならない。

## 6. 部活動指導の価値について

「運動部活動の指導をどう感じておりますか」の質問に対して、「子どものためにも重要な役割であり、大いにやりがいを感じる」と回答したコーチが36%と最も多く、次いで「やりがいを感じる」22%、「仕方なく引き受けたが、ある程度はやりがいを感じる」は19%であった。「嫌々やっている」は1%のコーチが感じている。また「やりがいを感じない」は0%であった(図15)。ジュニアコーチとして運動部活動は大切な役割であることを自覚している。

このことは平成9年文部省(現文部科学省)の調査<sup>3)</sup>によると、「運動部活動を通じて、多くの生徒や保護者がスポーツの楽しさと同時に体力の向上、人間的な成長・友人の広がり、生活の充実などが図れている」と報告している。また運動部員や顧問ばかりでなく、生徒・保護者・教員・校長のいずれも90%以上が、「運動部活動は運動部所属生徒の今現在の生活・将来のために役立つ」としている。つまり、運動部活動は生きがい、生涯スポーツにつながる基礎作り、体力向上・健康維持、豊かな人間性の育成、充実した学校生活を促進する役割があるのである。その運動部活動の意義を改めて再認識した。

## 7. 指導力に関する自己分析・講習会および研修会の参加・バレーボールコーチライセンスの取得実態

ジュニアコーチ自身は、自己の指導力についてどのよう

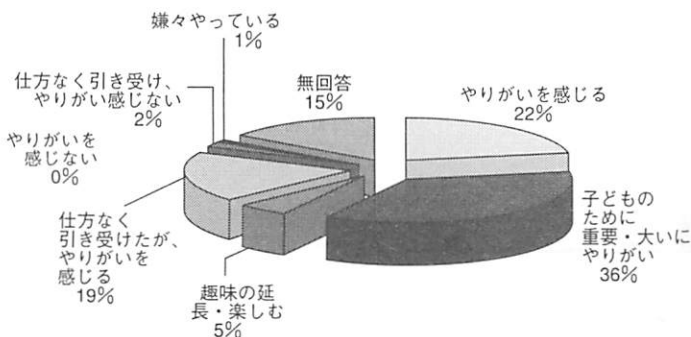


図15 部活動の指導観

に評価しているのであろうか。下記の4項目を挙げ、該当する1項目を選択してもらった。

「十分な指導力を持っており、指導上困ることはない。」  
 「適度な指導力はあるが、さらに向上したい。」  
 「多少の指導力はあるが、まだ不足している。」  
 「全く不足しているので、悩みが多い。」とし、最も多かった回答は「多少の指導力はあるが、まだ不足している。」が48%と半数近くおり、まだまだ力不足であり研究したい、と積極的な姿勢が伺える。また、25%のコーチは「全く不足しているので、悩みが多い。」と回答している(図16)。この調査結果は「望ましい運動部活動の在り方(改訂版)」<sup>3)</sup>での「自分の専門的指導力について」の集計結果と類似している。それによると、「少しは指導力があるが、不足している。」は47%であり、ついで「全く不足しているので誰か他に変わってほしい」との回答が23%であった。いずれの調査においても、23~25%のコーチが専門的指導力不足を感じていることを示している。また、「十分な指導力を持っており、指導上困ることはない。」は3%、「適度な指導力はあるが、さらに向上したい。」は24%であった。

各種講習・研修への参加状況を調査した。「指導力を向上させるために講習会や研修会に参加したことがありますか」の問いに対し、「ある」が60%、「ない」が40%であった(図17)。この調査結果においても茨城県の調査結果<sup>3)</sup>とはほぼ一致する。茨城県の調査結果は「ある」が66%、「ない」が33%、「無回答」1%であった。

また、コーチライセンスの取得に関して、ジュニア年代コーチは「ライセンスを持っていない」が99%に上ることが分った(図18)。

この2つの結果(図17・18)より考えられる理由の1つは、中学校教員の勤務環境にある。教員自身、常に自己を啓発し、能力開発をするために「講座」や「セミナー」といった研修が重要であることを認識している。しかしながら、現場にいる教員にとって学校を離れることは、周囲

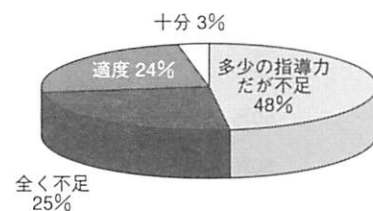


図16 自身の指導力

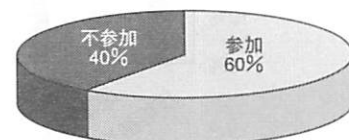


図17 講習会等への参加

の教員に自分の仕事を任せることになり、つい遠慮してしまう。特に中学校の場合には出張教員の授業が空いた場合は、出張教員の代わりに空き時間の教員が補講形態をとり、その教室へ行き自習監督をしなければならない。教員は通常1日あたりの空き授業時間が1~2時間であるため、その時間を有効に事務処理や教材研究の時間に充てている。まして部活動顧問の場合、放課後の時間は部活動運営に携わるため、空き時間を有効に利用しなければならない。また、研修期間中には現場の仕事が蓄積され、さらに仕事の進行状況が悪化し、自己負担が増す。山口<sup>13)</sup>の調査によると「平成12年度競技力向上C級・B級指導者養成講習会への参加者283名に対する調査（回収率100%）から、教員の講習会への参加形式について「研修扱い」がわずか2名のみであり、「職免扱い」は59名で全体の42%、「休暇などの時間外扱い」は78名で56.1%であった。その理由として、「研修が認められなかった」が22%、「あくまで自己研鑽であるため」が44%であった。また「校内の雰囲気や研修を認めず、申請しづらかった者もいた。」という報告がある。このように現場ではなかなか「研修権」を行使しづらい雰囲気があることも現状として存在し、協会側から学校側へ派遣要請文書の送付等の配慮がなされれば、解決の一助になると思われる。

現状は厳しいものであるが、今後のスポーツ振興については、特に地域における学校部活動指導者が、地域スポーツに大きく貢献しなければならない状況になると考えられる。その場合に学校枠外での活動となるために、やはり法的根拠に基づいた「コーチライセンス」の所持が必至になるであろう。そのことから「研修権」の行使を保障しな

なければならない。

審判資格に関しては「(財)日本バレーボール協会公認審判員の資格を持っているか」と尋ね、「持っている」との回答が16%であり、「持っていない」との回答が84%であった(図19)。これは「コーチライセンス」と比較すると所持率はいくぶん高い値を示している。コーチが所持している審判ライセンスの99%は「B級」であった。このことは、財団法人日本体育協会公認「競技力向上指導者ライセンス」を獲得するには15日を越える研修が必要であるのに対し、バレーボールの「B級審判員」取得に関しては日数的・曜日的(土日祝祭日に開講)にも比較的取得しやすい環境にあったこと、もう一つは、千葉県バレーボール協会の審判委員会が積極的に研修会を開催したことにより、受講者が研修の機会を自身で選択できることによるものが大きいと考えられる。

では、ジュニアコーチはどの領域の研修会に参加していたのだろうか。最も多かったのは「バレーボールの技術指導」の50%であり、「スポーツ医学・障害」の24%、「トレーニング方法」の12%、「コーチング法」の5%であった。また、「参加してみたい講習会・研修会」については、「バレーボールの技術指導」の27%、「トレーニング方法」の23%、「コーチング法」の19%、「スポーツ医学・障害」の11%であった。参加者側の意志と主催者側の狙いは、「技術指導」に関してはほぼ一致していると考えても良いが、「トレーニング法」「コーチング法」「スポーツ心理学」に関してはやや開講が少ないためか、参加希望が多く見受けられた(図20)。

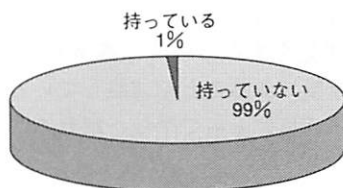


図18 コーチライセンス所持

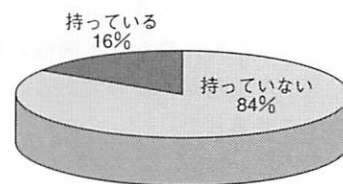


図19 審判ライセンス所持

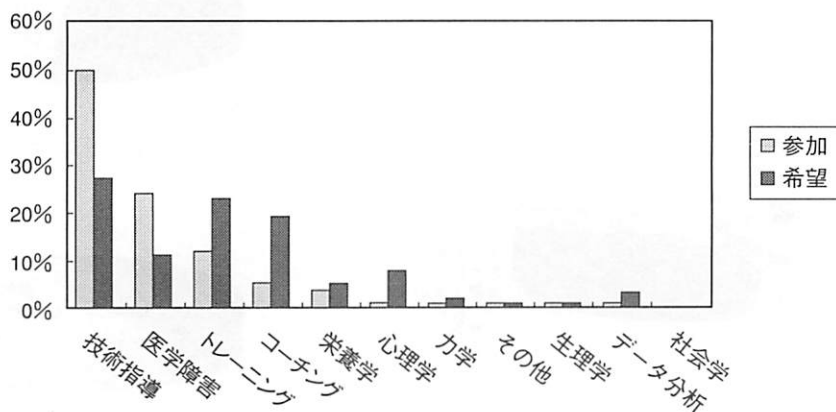


図20 参加した講習会(左)と希望する講習会(右)の関係



## IV. 結 論

本研究の中軸となる結果を要約し、以下に示す。

ジュニアコーチは

1. バレーボール指導歴5年未満のコーチが23%存在する。
2. バレーボール競技未経験コーチが46%存在する。
3. バレーボール部を仕方なく引き受けたコーチが41%存在する。
4. 部活動指導に関して「やりがいを感じている」等の積極的意識を持っているコーチが82%存在する。
5. コーチ自身の指導力は、「多少の指導力はあるがまだ不足している」と48%が感じている。
6. 講習会等への参加経験は、60%である。
7. 参加した講習会と希望する領域は、「技術指導」では双方高い値を示したが、「トレーニング法」「コーチング法」「スポーツ心理学」に関しては参加希望が多く見受けられた。

以上にまとめられるように、現場の実態調査により、現場の実態、生じている問題点が明らかになった。

バレーボールの指導経験が浅いコーチ、競技未経験コーチ、仕方なく引き受けたコーチなども含め82%のコーチがやりがいを感じており、「やりがいはあるが競技経験がない」等の理由で指導力不足を感じているコーチが多く存在している。したがって、ジュニアコーチを対象とした、正しい知識を伝達するためのカリキュラム作りの必要性が認められた。

## 参 考 文 献

- 1) 鮑戸宏：社会調査ハンドブック。日本経済新聞社、1987。
- 2) 千葉県総合企画部統計課、2003。千葉県総合企画部統計課：学校教員統計調査。千葉県総合企画部統計課、2001。
- 3) 茨城県教育庁保健体育科：第31集 学校体育指導資料「望ましい運動部活動の在り方」(改訂版)。2002。
- 4) 今津孝次郎：校長・教頭・一般教員のストレス調査(要約)。http://www.educa.nagoya-u.ac.jp/soci/member/imazu/essay031.html。2003。
- 5) 文部省：中学生・高校生のスポーツ活動に関する研究協力者会議 運動部活動の在り方に関する調査研究報告。1997。
- 6) 文部科学省：平成13年度学校教員統計調査。2001。
- 7) 大庭茂美、赤星晋作：学校教師の探求。学文社、pp68-70、2001。
- 8) 小野剛：クリエイティブサッカーコーチング。大修館書店、pp12。1998。
- 9) 東京都スポーツ振興審議会：東京都の青少年スポーツ活動振興のための条件整備について(中間のまとめ)。pp11。1996。
- 10) 東京都スポーツ振興審議会：東京都の青少年スポーツ活動振興のための条件整備について(中間のまとめ)。pp21。1996。
- 11) 辻新六、有馬昌宏：アンケート調査の方法。朝倉書店、1987。
- 12) 山口満：教師から見た中学校クラブ活動と部活動-中学校におけるクラブ活動と部活動の実態に関する調査研究 その2-。昭和61年度筑波大学学内プロジェクト研究一般研究報告書。1987。
- 13) 山口隆文：サッカーの競技力向上を目指す指導者養成に関する研究-学校部活動指導者(教員)の研修権を中心に-。筑波大学体育研究科研究論文集第23巻、2001。
- 14) (財)日本サッカー協会：JFA news増刊号 強化指導指針1996年版「世界」と闘う日本代表を目指して-。(財)日本サッカー協会、1996。
- 15) (財)日本バレーボール協会：資料 チーム登録数 平成6年度～平成14年度。(財)日本バレーボール協会、2003。